チュチェ思想の原理解説3

国と民族の
興亡盛衰の基本



国と民族の興亡盛衰の基本

朝鮮・平壌

外国文出版社

チュチェ103（2014）年

「チュチェ思想の指導的原則は、党および国家活動、革命と建設のすべての分野で主体性を確立するための指針です」

金　正　日

はじめに

人間は誰もが国と民族の一構成員として生きており、国と民族の運命を貴重にしている。それは国と民族の命運によって個人の運命も変わるからであろう。

地球上には多くの国や民族があり、それぞれ固有の歴史をもっている。その歴史の中に民族の各構成員の運命の歴史も刻まれているのである。 発展と繁栄、滅亡の悲運が入り混じった国と民族の歴史には、当代の民族構成員の創造と闘争の歴史、あるいは涙の悲劇の歴史が秘められている。

それゆえ、人々は国と民族の運命に切実な利害関係を持ち、自民族が尊厳あり誇りのある民族に、自国が世人の羨む強大国に発展することを願うのである。

今日、多くの国と民族は、自主の旗を高く掲げ、外部勢力のあらゆる支配と従属、挑戦を退けて自主的発展と繁栄を遂げるために力強くたたかっている。反面、自国と自民族の進むべき正しい道を探せずに失敗と挫折の中でさまよう国と民族もある。

すると国と民族の運命、興亡盛衰ははたして何によって決まるのであろうか？

国と民族の強盛・繁栄の真の道はどこにあるのか？

どの民族であれ、運命開拓のまっすぐな道を進むためには、羅針盤のような正しい思想を持たなければならない。羅針盤がなければ東西南北の方向がわからないように、正しい思想を持っていない民族は航路を失い、風任せに漂流する難破船のようになってしまう。

それでは今からチュチェ思想が明らかにする指導的原則を羅針盤にして、国と民族の興亡盛衰を論じ、民族繁栄の真の道を探してみよう。

目　次

「チュチェ思想の要求通り革命と建設を進めるためには、党および国家活動で自主性を堅持し、具現しなければなりません」

金 正 日

1. 自主の支柱をしっかりと打ち立て

自主的に生きようとするのは、人類の志向であり念願である。

自主の道を進むことは誰も押しとどめることのできない時代の流れである。

正義と真理を愛する多くの進歩的人民を魅惑させ、彼らの闘争の旗じるしとなっている自主！

チュチェ思想の指導的原則は、国と民族の運命開拓において自主的立場を確立することを求めている。

自主的立場とは国と民族の運命開拓におけるすべての問題を独自の判断と決心によって自己の利益に即して処理し、自己の責任のもとに自力で解決していく立場である。

この立場はあらゆる支配と従属から脱して自主的に生きようという、人民大衆の根本的要求に全的にかなうものである。

自主的立場を堅持するための原則は、思想において主体、政治において自主、経済において自立、国防において自衛をその内容としている。

それについて一つ一つ見ていこう。

1）主体と事大

1955 年 12 月 28 日、

この日は朝鮮の現代史上画期的意義を持つ日として記録されている。

当日に偉大な金日成主席が「**思想活動において教条主義と形式主義を一掃し、主体性を確立するために**」という著作を発表したのである。

金日成主席はこの著作において思想分野で主体性を確立するための諸問題について明らかにした。

それでは思想において主体性を確立することが何を意味し、それがなぜ朝鮮人民の新しい社会建設で重要な問題として提起されたのであろうか？

思想において主体性を確立するということは、自己の運命の主人だという自覚を持って自国、自民族を中心にすえて思考して実践し、すべての問題を自己の知恵と力で解決していく観点と態度を持つことを意味する。たやすく言えば、自分の定見を持つということである。

「虎に襲われても気さえ確かなら死なない」という格言もあるが、いくら危険な敵と対抗し、克服しにくい難関にぶつかるとしても、自らの信念をもって粘り強くたたかえば勝利することができる。

思想において主体性を確立してこそ、民族の運命を開拓するうえで提起されるすべての問題を他国の方式ではなく自国の方式で、他国の力によってではなく自民族の力で自主的に、創造的に解決していくことができる。

思想において主体性を確立しなければ自然に事大主義に毒されるようになる。事大主義は大国に仕え、崇拝する奴隷的屈従思想として、それに陥れば自国の力を信じずに他国のもの、大国だけを仰ぐようになる。

それで人が事大主義に走れば愚か者となり、民族が事大主義に染まれば国を滅ぼすというのである。

事大主義は朝鮮人民をして亡国の悲運をなめさせた根深い思想毒素であった。

朝鮮の歴史上国力が強くて東方の千年強国と呼ばれていた高句麗の時代には事大主義がなかった。しかし高句麗が滅びた後、腐敗した無能な封建支配層は、反動的儒教教理を信じながら事大主義に陥り始め、この事大主義が朝鮮封建王朝の末期に至っては国の自主的発展にもっと厳重な弊害を及ぼすようになったのである。事大主義に毒された封建支配層は、他国が資本主義の発展を遂げている時、外部的には大国に対する崇拝と阿諛屈従、内部的には党派争いで歳月を送り、日本軍国主義と欧米資本主義列強が侵略の魔手を伸ばした時には、自国民の力に依拠することは考えずに、それぞれ外部勢力を引き入れて自らの残命を維持してみよ

うとした。

それで親日派が勢力を得れば日本軍が王宮を守り、親露派が権力を握ればロシア軍が王を護衛し、親清派が優勢すれば清軍が王宮を守る有様となった。王宮を守ることさえ他国の軍隊に任せたのだから、国は誰が守り、民族の運命はどうなったであろうか。

事大主義に毒された腐敗した無能な封建支配層によって五千年の民族史を誇っていた朝鮮民族が一朝にして日帝に国権を全部奪われ、亡国の民としての運命を強要されたのである。

偉大な金日成主席は 祖国解放闘争の道に身を投じた初期から事大主義の弊害から深刻な教訓を汲み取り、それに反対してたたかった。

しかし事大主義をはじめとする古い思想の残りかすは、決して先進的な思想にたやすくその席を譲ったのではない。長い間人々の頭の中に根深く残っていた事大主義は、朝鮮の独立をめざす抗日武装闘争の時期や新しい民主朝鮮建設の時期、戦後社会主義革命の時期にも、自主と創造の道を進む朝鮮人民の前途に大きな障害をきたした。

朝鮮において事大主義の弊害は 3 年間にわたるアメリカとの苛烈な祖国解放戦争の時期に顕著に露呈され、戦後社会主義革命と社会主義建設が速いスピードで進捗されるなかで、それ以上我慢できないものとなってきた。

この時期に事大主義、教条主義者たちは、朝鮮の具体的な現実はまったく見ようとせず、頭から自国のものをないがしろにし、他国のものをもちあげる民族虚無主義に落ちいり、すべてを他国の方式で、他国に依存して行おうとした。

事大主義と教条主義の弊害は、思想活動分野でもっとも甚だしく現れた。

事大と教条に毒された人たちは、朝鮮労働党の路線と政策を研究し、解説・宣伝する活動に力を入れるのではなく、大国の言うことを盲目的に繰り返し、党の革命伝統と朝鮮人民の闘争史には目を向けず他国のものだけを機械的に教えようとした。

ある軍隊の休養所には朝鮮の金剛山や妙香山のような美しい風景を描いた絵ではなく他国の風景画がかかってあり、ある民主宣伝室にも他国の 5 カ年計画にたいする図表はあっても朝鮮の3カ年計画にたいする図表は一枚もない状態であった。

もっと厳重なことは、この時期に党内に忍び込んだ分派・事大主義者たちが党建設と党活動を各方面から妨害していたことである。彼らは党内で権勢と官僚主義を助長させ、党の統一団結を破壊しようと悪辣に策動し、ひいては大国の修正主義者、大国主義者と結託して党と政府を転覆する陰謀までたくらんでいた。

事大主義を一掃せずには戦後の社会主義革命と社会主義建設を一歩も前進させることができなかった。ちょうどこうし

た状況の中で偉大な金日成主席のこの著作が発表されたのである。

金日成主席は著作で次のように述べている。

「わが党の思想活動における主体とはなんでしょうか。われわれはなにをしているのでしょうか。われわれは、どこかよその国の革命をおこなっているのではなく、まさに朝鮮革命をおこなっているのです。この朝鮮革命こそ、わが党の思想活動の主体なのです。したがってすべての思想活動は、必ず朝鮮革命の利益に服従させなければなりません。われわれがソ連共産党の歴史を研究するのも、中国革命の歴史を研究するのも、マルクス・レーニン主義の一般的原理を研究するのも、すべてわが国の革命を正しくなし遂げるためであります」

金日成主席は著作で、もっと甚だしくなっている事大主義と教条主義の具体的現象とその悪結果について指摘しながら、それを決定的に一掃して思想分野をはじめとする革命と建設のすべての分野で主体性を確立することについて強調した。

著作の発表を契機にして朝鮮では思想活動分野で主体性を確立するためのたたかいを優先させながら党建設と政権建設、武力建設と経済建設、対外活動など各分野で事大主義と教条主義を一掃する一大攻勢を展開した。

この時期に主体性を確立するための朝鮮人民の闘争は

現代修正主義とセクト主義に反対する闘争と密接に結びついて行われた。

反党反革命分派分子とぐるになって、朝鮮労働党の活動に対して露骨に干渉する大国主義者の策動を断固と退けたのもこの時であり、朝鮮労働党が反帝反米闘争を放棄してアメリカと妥協するよう強要した、現代修正主義者の傲慢無礼な策動を排撃したのも、「統合経済」路線を唱えながら朝鮮を自らのコメコン（旧ソ連と東欧社会主義諸国が網羅していた経済協力機構）に加盟させようという彼らの圧力を断固と退けたのもこの頃であった。

事大主義と教条主義に反対し主体性を確立するためのこのような深刻な政治思想闘争の過程で朝鮮では国と民族を破滅へと追い込む、もっとも危険な思想毒素である事大主義が一掃され、人々の思想観点と思考方式で根本的な転換が起こり、思想分野において主体性が確立されるようになった。

それゆえ朝鮮人民はひとえに自分の力を信じて自らの要求と利益に即して自分が選択したチュチェの道、社会主義の道に沿ってまっしぐらに前進することができたのである。

もしその時、朝鮮で事大主義を排撃し主体性を確立する旋風を起こさなかったならば、政治思想強国として威容をとどろかしている今日の朝鮮、世界の人々が羨むチュチェの朝鮮について考えることができない。

では思想における主体性の確立が国と民族の運命開拓において

なぜもっとも重要で優先的な問題として提起されるのか。

それは一言で言って、人間のすべての行動を左右するのが思想であるからである。

それぞれの国と民族の運命を開拓する直接の担当者はその国の人民であり、彼らの行動を規制し、調節、統制するのはほかならぬ思想である。

したがって思想において主体性を確立することは社会生活のすべての分野、すなわち、政治や経済、国防分野においてチュチェ思想の要求を徹底的に具現するための先決の条件となる。

思想において主体性を確立するためには何よりも自分の運命の主人という自覚を持って国と民族の運命開拓の道を明らかにする正しい思想で武装しなければならない。

その思想がチュチェ思想である。

チュチェ思想は人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという原理に基づいてそれぞれの国と民族の運命の主人は、その国の人民自身であり、運命開拓をおし進める力もその国の人民にあるという真理を明らかにしている。そのようにして人々に国と民族の運命の主人という自覚を抱かせ、すべての問題を自国、自民族の力に依拠して解決していく観点と態度を持つようにする。

現在、チュチェ思想はその科学性と真理性、生命力からして数億万人民の心をとらえており、自主を志向し、正義と真

理を愛するすべての国と民族が選択して受け入れる思想となっている。現実は国と民族の前途を明らかにし、世界を照らす正しい思想がほかならぬチュチェ思想であることを見せている。

思想において主体性を確立するためにはまた、自国のものに精通しなければならない。

地球上には 200 あまりの国が存在し、それぞれの国の歴史や言語、風習、自然地理的条件は同じでない。こういう状況下で自国のものに精通してこそ自国、自民族のために立派に活動することができる。

自国の歴史や自国民の風習、生活感情を知らずには、自国民の利益と好みにあうことを行っていくことができない。また自国の自然地理的条件を知らなければ自国民の利益と自国の実情に即した工業を建設することができず、自国の風土に即して農業を営むこともできない。

自国のものを知らないということはすなわち、自分の力も知らないということである。自国民を知らずには、自国にどういう資源があるかを知らずには、自力で富強な国と民族を建設しようという考えも持つことができない。

1957 年 6 月の初め、偉大な金正日総書記が平壌第一中学校に通う時期の事である。

試験を前にして、何人かの学生たちが外国の植物学者が研究した果物の品種について復習をしていた。

学生たちの話を注意深く聞いていた金正日総書記は、

今度は朝鮮のりんごについて誰か話して見ないかと聞いた。学生たちはお互いに顔を見上げるだけであった。すると総書記は、教えなかったから知らないのだ、その上復習問題にも無いから知る必要が無いというわけだね、と独り言のようにいった。

しばらく考え込んで窓の外を見つめていた総書記は低くも深刻な語調で、皆さん、考えてみなさい、私たちが一回も行って見なかった他国の果物についてはその生物学的特性からして具体的に知っているのに、私たちが日常的に食べている朝鮮のりんごについては知らずにおり、また知ろうともしないから、これこそ恥ずかしいことではないかと言いながら学生たちに朝鮮のりんごの優位性と特性について詳しく説明しはじめた。

金正日総書記は続けて、私たちが他国のりんごについて学ぶ目的も朝鮮のりんごについてもっとよく知り、それをもっと立派なものに作り変えていこうというところにある、自国のものは知らずに他国のものだけを知っていれば他国に対する幻想だけが生まれ、自国のものはみなつまらないものと考えるようになる、定見を持って勉強しなければならない、一つを学んでも朝鮮革命のために、われわれのものをもっと立派に、もっと速やかに発展させるために学ばなければ、これを肝に銘じよう、と言った。

総書記はこのように学生たちの誤った考え方や姿勢を悟らせ、彼らが他国のものではなく自国のものに精通した朝鮮の人材に、国と民族を頼もしく支える働き手に育つように導い

たのである。

思想において主体性を確立するうえで民族の文化を発展させ、高い民族的自尊心を持つことが重要である。

自国の文化、自国の科学・技術を積極的に発展させ、民族の構成員たちの文化・技術水準を高めてこそ他国に対する依存心をなくし、思想において主体性を確立することができる。

民族的自尊心は、国と民族の隆盛・繁栄を裏付ける精神的原動力である。それなしには自主的に生きていけず、民族的独立と尊厳を守ることができない。高い民族的自尊心を持った人民だけがいかなる蔑視や虐待も許容せず、民族の尊厳と運命のために不屈の意志でたたかうことにより勝利を収めることができるのである。

とりわけ小さな国であるほど強い民族的自尊心を持つことが重要である。他国より領土も小さく、人口も少ないが決して自民族が他民族より劣らず自民族のものが一番いいという思想・感情を持つとき、自国のものを愛して貴重にし、それを輝かしていくことができるのである。強い民族的自尊心を持たなければ民族虚無主義、事大主義に陥って、自国のものを丸ごと捨てて他国のものを受け入れるようになり、自民族の力ではなく他国の力、他国の援助にばかり期待をかけるようになる。

自国のものではなく他国の「援助」によって民族の「富強」を達成しようとするのは、 亡国への道である。

小さな国であるほど大国に対する事大と屈従を許容せず

に強い民族的自尊心を持たなければならず、そうしてこそ自国の人民が奴隷ではなく、国の主人として生きることができるのである。

主体と事大！

事大は亡国への道であり、思想における主体性の確立に真の民族繁栄の道がある。

真に国と民族を愛し、民族の富強・繁栄を願うならば、このチュチェの真理を肝に銘じよう！

2）現代政治の生命線

地球上の多くの人は政治に深い関心を持つ。

当該国がどういう政治を実施するかによって国と民族の運命、各個人の運命が決定される。進歩的で先進的な政治が実施されれば、国と民族が栄え、社会が発展するが、反動的で保守的な政治が実施されれば国と民族が塗炭の苦しみにあえぎ、あらゆる社会悪が蔓延るようになる。人類の歴史は誤った政治により国と民族を滅亡させ、人々を貧窮に陥れた事例を数多く記録している。

「悪い政治はトラより恐ろしい」

この言葉は古代中国の有名な哲学者であり、政治家であった孔子の言葉である。

B.C. 516 年、孔子が弟子たちと一緒に太山のふもとを通

りかかっている時、ある婦人が地面にうつ伏せて悲しく泣いていたと言う。いきさつを聞いてみたところ、トラが彼女の舅を襲って食ってしまい、次は夫を、今回は息子を食ったというのである。

孔子が彼女にこんなに恐ろしい所をどうしてまだ発たずにいるのかと聞くと、彼女はここで暮らせば過酷な税金を払わなくてもいいから、トラさえいなければ、住みよい所であると答えたのである。

孔子はその言葉を聴いて弟子たちに、「お前らはこの言葉を忘れるな！悪い政治はトラよりもっと恐ろしい」とくれぐれも頼んだという。

これを過去のことだとばかり考えてはいけない。

今日の世界にも誤った政治により苦痛をなめている国や民族が多い。

現在、世界の政治舞台では、自らの覇権主義的な野望を実現しようと躍起になっているアメリカ帝国主義をはじめ、帝国主義者の強権政治が幅を利かせている。こうした強権と支配政治により一部の国では従属、追随への政治を行っており、結果これらの国では自民族の自主権と尊厳を守り通せず、その運命が外部勢力によって意のままに翻弄されているのである。

人類はこうした政治を排撃し、人民のための真の政治を志向している。

ならば、どういう政治が真の政治なのか。

現代政治の生命線は何か。

それはほかならぬ自主政治なのである。

金正日総書記は次のように述べている。

「人民大衆の運命は国と民族の運命と一つに結びついており、国と民族の運命は自主的な政治によって保証されます」

自主政治は自国民の民族的独立と自主権を固守する政治であり、自国民の利益を擁護し自国民の力に依拠する政治である。たやすく言えば、自国民の要求と自国の具体的実情に即してすべての路線と政策を作成し、自国民の力に依拠してすべての問題を解決していく政治である。

自主政治は外部的には、他国に依存したり追随したりせずに自民族の要求と利益を擁護、固守し、内部的には自主的に生きようという人民大衆の要求を基本にすえて、人民が主人となった政治を実施する。

現代政治において自主性を堅持すれば、民族的繁栄を遂げて人民大衆の自主性を実現することができるが、事大と教条へと進むならその国と民族は滅びるようになる。

朝鮮の政治は徹底した自主政治である。

現代の名望の高い政治元老である偉大な金日成同志と金正日同志は自主政治を確固たる政治信条とし、革命指導の全期間にわたって徹底した自主政治で朝鮮人民の闘争を勝利一途へと導いてきた。

金日成主席が切り開き導いてきた朝鮮革命は、最初から自主か、従属かを分かつ鋭い対立と闘争の中で行われた。主席はいかなる場合にも自主的立場を変えたり、譲歩したりしたことが無かった。

戦後、金日成主席が社会主義革命に関するテーゼを準備していたときのことである。

主席は戦後、朝鮮人民の志向と国の具体的現実にたいする科学的洞察に基づき社会主義革命のスローガンを提示する主客観的条件が成熟したことを確認し、社会主義革命に関するテーゼを発表する準備をした。

しかし 1955 年の初め、ある国の高位級人物は、テーゼを見れば朝鮮の党が都市の手工業者たちを社会主義的に改造して利用しようとしているそうだが、それは資本主義を扶植させることではないかと、いうのであった。修正主義者たちは農業協同化を実現するためのわが党の政策も主観主義的だと誹謗した。彼らはヨーロッパの社会主義諸国ではテーゼなしにも社会主義革命を遂行しているのに朝鮮でテーゼまで出す必要があるのかといった。

そのとき主席はわれわれがテーゼを打ち出すのがなぜ悪いのか、他国ではやらなかったとしてもわれわれは絶対に譲歩しない、われわれの方式でやって行く、他国でやらなかったとしてわれわれもやってはいけないというわけは無い、と反論した。

社会主義建設綱領を置いて修正主義者たちと一大論争

を行った主席は、その時から1週間後である1955年4月に、朝鮮革命の性格と課題に関する歴史的な著作「**すべての力を祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義建設のために**」を発表したのである。金日成主席の賢明でエネルギッシュな指導により朝鮮では、他国では10年かかっても実現することができなかったという社会主義革命をたった4～5年間で遂行したのである。

金日成主席が自主政治を徹底的に実施したため朝鮮では他国の干渉を許し、他国の指図通りに動いたことが一度も無く、大国のいかなる圧力にも屈したことが無かった。

偉大な金正日総書記は、主席の徹底した自主政治によってこの地にもたらされる驚異的な現実を直接目の当たりにしながら、自主政治は現代政治の生命線であるという哲理をさらに確信した。

総書記は政治分野において一貫して自主の原則を押し立てて堅持しながら朝鮮革命を自主一途へと導いてきた。

旧ソ連と東欧諸国で社会主義が崩壊し、「改革」、「改変」の風潮が巻き振るっていた1980年代の末から1990年代初めの厳しい試練の時期にも、総書記は社会主義を最後まで守るという自らの政治的信念を明白に表明することにより、世人の前でいささかの揺るぎもない自主的信念と胆力を示した。

しっかりした自主の政治信念の持ち主である金正日総書記は、新世紀に自主の旗をさらに高く掲げて大国との関係も発

展させ、国際政治におけるあらゆる問題も解決した。

朝鮮が人工地球衛星「光明星―2」号を打ち上げる際のことである。

国際条約にも明示されているように、宇宙の開発および利用はすべての主権国家の合法的権利である。

にもかかわらず敵対勢力は、朝鮮が人工地球衛星を打ち上げようとするとミサイルの発射だと騒ぎ出し、激撃や制裁を云々しながら朝鮮半島の情勢を最悪の状態へと追い込んでいった。周辺諸国までも「自制」を建議しながら、朝鮮の衛星の打ち上げにブレーキをかけた。

自主か従属か、対決か屈従か。

世界の焦点が朝鮮に集中された。

この厳しい時期に金正日総書記は、人工地球衛星を打ち上げることが国の自主的権利を堂々と行使し、国力を百倍に打ち固める道であったため、ためらいなく断行するようにしたのである。

朝鮮の自主政治は敬愛する金正恩同志によって今日も変わりなく継承されている。

歴史は、ひところ帝国主義と強硬に対抗していた国が、世の中が変わり大勢が変わったとして反帝自主的立場を捨てた事例を少なからず記録している。

天のごとく信頼し従っていた偉大な金正日総書記を失い国中が血の涙に浸っていた時、敵は朝鮮でも何か「体制の変

化」が起こりやしないかと待ちわびていた。

しかし敵は妄想した。

朝鮮革命の陣頭には敬愛する金正恩同志が立っていた。

金正恩同志は、主席と総書記の胆力と気象をそのまま体現し、主席と総書記の方式ですべての活動を展開している偉大な政治家である。

金日成主席の生誕 100 周年慶祝閲兵式で行った初の公開演説で、敬愛する金正恩同志は偉大な大元帥たちが切り開いた自主の道、先軍の道、社会主義の道をまっすぐに進むという自らの固い決心、確固たる意志を内外に 闡明した。

今日の世界ではなかなかの胆力がなければ、自主の旗を掲げることも、それを堅持することもできない。

竹は焼けても真っ直ぐであり、白玉は壊されても白いという言葉がある。

朝鮮の自主政治には死ぬことがあっても民族の最高利益は少しも譲らないという非常な覚悟が脈打っている。

アメリカ帝国主義をはじめとする敵対勢力があれほど負けん気強くあがく中でも、朝鮮が自分の決心通りに実用衛星も打ち上げ、敵の狂乱的な戦争挑発策動も水の泡に帰させているのは、敬愛する金正恩同志の自主政治があったからである。

世界は 2012 年と 2013 年の激動的な出来事を通じて、いかなる場合にも揺るぎのない金正恩同志の自主政治の真髄

と威力をはっきりと見た。

それゆえ公正な世論は、朝鮮の自衛的措置を抑制するだけの処方が帝国主義者には無い、他の国では効き目があった制裁が朝鮮には通じない、結局は帝国主義勢力が朝鮮と妥協する道を選択するしかないと、いっている。

朝鮮が帝国主義超大国とも立ち向かって退けず、大国の圧力にも屈せずに進む政治大国になれたのは、自主政治の巨匠である不世出の偉人たちを頂いていたからである。

一世紀の前までも朝鮮は、事大と教条に陥った悲惨な植民地弱小国であった。

フランスのある漫画画家は、去る一世紀の前、橋の下にある「朝鮮」という魚に周辺諸国が釣竿をたらしている一枚の絵でもって、当時列強の角逐戦の場となっている朝鮮を形象した。

民族もその民族、地政学的位置も昔と変わりが無いのに、朝鮮が今日のように世界が公認する自主強国として光り輝くようになったのは、実に歴史の奇跡であるといわざるを得ない。この奇跡は、自主的信念と胆力の強い人民を育て上げ、国と民族の自主権と尊厳を誇らしく守っていく偉大な指導者を頂ければ、人民も偉大になり、国も強大になるという深奥な真理を実証した。

今日、自主政治の模範は朝鮮でのみ見られるのではない。反帝自主の道を力強く進んでいるキューバとベネズエラ、イランなど、多くの進歩的国が、帝国主義者の制裁と脅威、しつ

こい妨害策動が強化される中でも、民族的利益を固守し、自分の選択した道に沿って変わりなく前進している。それはこれらの国で自主政治を行っているからである。

自主の旗を高く掲げて前進しているこれらの国の経験は、世界の多くの国が自主政治を志向し、自主の道へと進むよう励ましている。

自主政治を実施するためには各国と民族が自己の指導思想を持って自らの決心に従って、路線と政策を独自に決定し貫徹していかなければならない。

政治において基本は政策を作成して執行することである。すべての路線と政策を自主的に決定し遂行してこそ自主的な政治であるといえる。路線と政策の作成、決定において自国民の要求と自国の実情を考慮せずに他国の指揮棒によって動くならば、国と民族が滅びてしまう。

自主政治を実施するうえで、対外関係における完全な自主権と平等権を行使することが重要である。国家の自主性は結局、対外関係において表現される。対外的に完全な自主権と平等権を行使するのは政治的自主性を保障するうえで根本的問題となる。自主権はすべての国と民族の神聖な権利である。世界には大国と少国、経済的に発達した国と立ち後れた国はあっても、すべての国と民族がみな平等であり自主的である。誰も他国の自主権を侵してはならず、また自らの自主権を侵されてもいけない。

帝国主義者の強要する「多党制」を受け入れたアフリカ諸国の実態を見よう。

アメリカは、「多党制」が「民主主義を保障する最善の方途」だと喧伝し、アフリカ諸国にそれを強要した。

「多党制」は帝国主義者が進歩的人民の団結を破壊して嫉視と反目を助長させ、対立と衝突を惹起させる狡猾な「触媒剤」であり、国と民族の運命を完全に滅亡させる、恐ろしい「罠」である。

しかし一部のアフリカ諸国は「多党制」の反動的本質を見極めず、対外関係で自主的立場を堅持しなかったところから、「経済援助」を付帯条件にかけて「多党制」を強要する西側諸国に屈服してしまった。

「多党制」を受け入れた国々の実体は悲惨であった。これらの国では執権党が一朝にして野党になり、新社会建設を主張した大統領が政権の場から追い出されるような悲劇が産生され、社会的無秩序と混乱、経済の荒廃化と種族間の対立、衝突の渦巻きの中に巻き込まれるようになった。

それゆえ今、少なからずの国が再び自主の旗を高く掲げて反「多党制」闘争に奮い立っているのである。

アフリカのある国の大統領は「多党制」を執拗に強要する帝国主義者の策動について「自分に合わない服をなぜ無理やりに着なければならないのか」と反問し、アフリカ諸国がいかなる政治体制を打ちたてようが西側諸国はこれに干渉して

はいけないと警告した。

御尤もである。

人が強要するからといって自分に合わない服を着れば、その人一個人がかかしのようになるが、国家が他国の強要を受け入れれば国民みんながかかしになってしまう。

自主政治の実現、自主的支柱の確立こそ、真理であり、真理は勝利する。

複雑多端な世界政治潮流の中でも自主政治を変わりなく固守していく時、勝利は常にその国と民族のものになるであろう。

3) 経済危機とその解決方途

最近年の資本主義諸国の経済を見ればきわめて不安定である。

数年前、アメリカ消費市場の柱をなし、投機および賭博の主な対象となっていた住宅市場で勃発した経済危機が原油価格の暴騰と大手銀行の破産へとつながり、経済の構成環を全部破壊してしまったことにより、今も全般的資本主義諸国は深刻な経済金融危機をなめている。

厳しい経済状況と食糧危機の悪結果により、2009 年度世界の飢餓人口は総じて 10 億 2000 万名だという。科学技術と文明が急速に発展している時代に世界的に６名当たり１名が

飢餓で苦しんでいるという事実は信じ難いことである。

もちろん経済恐慌、経済危機は、資本主義経済の本性から発生する必然的な現象である。しかし現在、資本主義経済を脅かしている経済危機は、その以前と比べるとき、実に深刻である。

アメリカの雑誌「タイムズ」は「資本主義をどのように救うべきか？」という見出しの記事で、現在、最大の問題は「資本家たちが自分自身の最も恐ろしい敵になったことである」と指摘している。フランスのある証券会社の分析家は「方途は資本主義を改革するところにある」と指摘した。これは資本主義がもはや限界に達したという認めでもある。

資本主義世界を襲っている危機、経済「津波」の根源は一言でいって不公正な資本主義経済そのものにある。

資本主義経済は利潤経済、自由化経済である。経済の自由化を要求し、個人主義に基づいている資本主義経済は必然的に経済生活において自然発生性と無政府性を生む。これにより企業家たちの詐欺とペテン、投機が跋扈し、この過程で資本家の興亡現象が激化され、経済生活で混乱と無秩序が支配するようになる。

「ドル基軸体制」である現国際通貨金融体制を見てもよく分かる。アメリカはドルを世界的な貨幣に格上げし世界市場を一つの国家市場のように利用しながら、全世界的範囲で搾取と略奪を行うために 1944 年 7 月に自らの経済力を背景に

して「ブレトン・ウズ協定」に基づく「ドル基軸体制」を打ち立てた。これはドルという一国の貨幣の価値変動、信用不安によっても世界的な貨幣危機に移りうる危険なものであった。現に 2008 年アメリカで発生した金融危機がヨーロッパに影響したため、ギリシアとアイランド、ポルトガル、スペイン、キプロスなど、多くの国が債務危機にあえいでいる。結局、アメリカ経済がくしゃみをすれば諸国の経済は風邪をひくのである。アメリカに依存する資本主義経済体制の衰弱性をよく見せている。

不公正で不平等なドル中心の現資本主義経済体制が存在する限り、腐敗して矛盾した資本主義経済制度が一掃されない限り、資本主義固有の持病は治せない。

経済発展を最も早く、円滑におし進める社会は人民大衆が主人となって経済の各構成部分を計画的に、科学的に運営していく社会主義社会である。

今日、世界の多くの人は社会主義強盛国家をめざして新世紀の産業革命を起こしながら経済強国建設へと邁進している朝鮮の飛躍的な発展に驚きを禁じえずにいる。

朝鮮がいかなる経済危機にも微動だにせず経済建設を力強く進めている秘訣は、自立的民族経済を建設したことにある。

自立的民族経済とは一言で言って、他国に従属せず独り立ちできる経済、自国人民に奉仕し、自国の資源と人民の力によって発展する経済である。自国人民に奉仕し、自国の資源と人民の力によって発展する経済を建設してこそ生産力を

発展させ人民の生活を保障することができる。かつて、帝国主義植民地支配により経済的・技術的に立ち後れている国々において、自立的民族経済を建設することは死活の問題として提起される。

帝国主義者は今日も、他国を経済的に従属させようと策動している。こういう状況の下で自立的民族経済を建設しなければ帝国主義の支配と従属から完全に脱することができない。

もちろん経済的・技術的に立ち後れた国々において、自立的民族経済を建設することは言葉のように容易ではない。特に立ち後れて奇形的な経済を譲られた条件の下ではなおそうである。しかし、困難だからといって自立的民族経済を建設しなければ、立ち後れた状態から永遠に脱することができず、他人に物乞いをしなければ生きていけなくなる。

他国に従属されずに生きていくためには、何のことがあっても自立的民族経済を建設しなければならない。苦あれば楽ありという言葉もあるように、苦労をしてでも自立的民族経済を建設しておけば、人民に裕福な生活を保障することができ、国と民族の尊厳も守ることができる。

自力更生の原則を守ることは、自立的民族経済建設における優先的な要求である。

自力更生とは文字通りに自分の力で立ち上がるという意味である。自分の力を信じて粘り強くたたかえば、いくら厳しい条件でも自立的民族経済を建設することができる。

戦後朝鮮で起こったチョンリマ大高揚運動も自力更生の結実である。このとき朝鮮人民には資材や資金が極めて不足し、労力も緊張していて、人民の生活状況も困難であった。このとき一部の人々は敗北主義に陥って前進の速度を緩めようと提起し、一部の人々は外国の援助に期待をかけたりした。

有るものより無いものがもっと多かった厳しい中でも、朝鮮の労働者階級と人民は 自力で爆弾を作って敵と戦った抗日革命闘士たちの闘争気風と革命精神に見習い、無いものは作り出し、足りないものは探し出しながら、ぶつかる険路と難関を自分の力で乗り切っていった。

自力更生の炎が力強く盛り上がるなかで、自国の資材、自国の技術で電気機関車、掘削機、ブルドーザー、大型工作機械を短い期間で作り出す大きな成果が遂げられた。自力更生の革命的気風は中小規模の工場、企業所でも発揮されて、一年の間に工作機械の子生み運動で国家計画外に一万三千あまりの工作機械が増産された。

それゆえ偉大な金日成主席はその時期を感慨深く回顧しながらわれわれに自力更生の革命精神があったがためにチョンリマに乗ることができた、誰かがわれわれをチョンリマに乗せてくれたのではないと意味深い話をしたのである。

偉大な金正日総書記は自力更生の旗のもとに強盛国家建設をめざす朝鮮人民の闘争を導いてきた。

2008 年 12 月 24 日、チョンリマ製鋼連合企業所

の労働者階級を訪ねた金正日総書記は新しい革命的大高揚の烽火を点じながら、この烽火は自力更生の革命精神で燃え上がらせるべきである、難関と試練が重ねあっても自力更生を体質化した朝鮮人民の尽きない創造力がある限り強盛国家建設の勝利は確定的であると言った。

金正日総書記は2009年1月、われわれは今後も自力更生だけが生きる道だというスローガンを掲げるべきだ、新しい革命的大高揚の烽火も自力更生で盛り上がらせ、強盛国家の扉も自力更生で開かなければならないといった。自力更生の革命精神があったがゆえに朝鮮人民は今日、信念も高く強盛国家建設を進めているのである。

自立的民族経済を建設するためには、経済を多方面的かつ総合的に発展させなければならない。

人々の生活に必要な商品の数は実に数万種に達する。人民の生活上の需要を 国内で基本的に生産保障するためには、経済の各部門を揃えていなければならない。分業が高度に発展している今日、ある一部門、ある一工程でも欠けているなら経済は速やかに、安全に発展することができない。

1950 年代の半ば、現代修正主義者たちは、国際社会主義運動内で専横を働きながら、朝鮮に自らの「路線」と「政策」をそのままおし付けようとした。当時、中工業を優先的に発展させながら軽工業と農業を同時に発展させるのは、朝鮮の社会主義経済建設の基本路線であった。

彼らは朝鮮のように何も無い廃墟の上でいったい何を持って重工業を優先的に発展させ、軽工業と農業を同時に発展させるのかと中傷した。また、朝鮮で近代的な機械を生産するのは時期尚早であり、また、収支も合わないから原料を生産し、機械は輸入して使うのがいいと言った。

もし彼らの言葉どおりに鉱石でもたくさん採掘して他国に売りながら生きて行ったなら、かつての立ち後れた境遇から永遠に脱することができず、次代に譲るものはカランとしたトンネルだけであっただろう。また、機械を自力で作るのが難儀で骨が折れるからといって、機械を輸入して国の工業化や技術改造を行おうとしたなら、何十年かかったか分からないだけでなく、いつになっても自立的民族経済を建設することができなかったであろう。結局これは自立か依存か、自主か従属かを分かつ重大な、運命的な問題であった。もしこのとき朝鮮が現代修正主義者の「路線」と「政策」に従ったなら、旧ソ連と東欧社会主義諸国が崩壊するとき、同じ運命を逃れなかったであろう。

世界的にいかなる経済危機が襲ってきても経済を安全に発展させるためには、自分に必要なものを基本的に自国で生産できるように、経済を多方面的に、総合的に発展させる以外にほかの道はありえない。

自立的民族経済を建設するためにはまた、経済を現代技術で装備し、民族技術幹部を大々的に育成しなければならない。

今少なからぬ国は、豊かな原料資源を持っていながらも、自らの技術が無いためそれを積極的に開発できずにいたり、やっと原料や半製品を作って廉価で他国に輸出し、その代わりに高価な機械設備を始め各種の製品を輸入して使ったりしている。こういう不平等な境遇から脱するためには技術問題を早く解決し、それに基づいて経済を発展させなければならない。

現代は科学と技術の時代、情報産業の時代である。今日の世紀、21 世紀には人間の知能労働によって物質的富が創造され、社会が発展していく。去る世紀には物質的富を分配するうえで生産手段を誰が掌握しているかが基本であったとすれば、今世紀には誰が人材をもっとたくさん持っているかが基本となっている。

これは、民族技術人材の育成が自立的民族経済建設においていかに重要な問題であるかを見せている。他国の技術人材に頼っては決して自国人民のための経済、自国人民の力に依拠する経済を建設することができない。

朝鮮では最短期間で世界の前列に立つために、大胆に最先端技術の開発を進めている。

朝鮮の科学者たちと労働者は、コークス炭を使わずに国内に豊富な無煙炭で鉄を生産する方法を研究完成した。それで城津製鋼連合企業所、チョンリマ製鋼連合企業所をはじめとする重要鉄生産企業所にチュチェ鉄生産システムを導

入した。これは金属工業発展における一つの革新である。農業部門では自己の実情に即したハイブリッド稲をはじめ、多収穫穀物品種が育成され、新しい有機農法、環状循環生産システムの拡大導入をはじめ、新世紀の要求にかなった科学的な営農方法と営農技術を確立するための活動が力強く行われた。

現実は自らの民族技術人材を育成し、彼らに依拠するとき経済を成功裏に建設していくことができるということを見せている。

自らの原料、燃料基地を抜きにしては自立的民族経済建設について考えることができない。原料や燃料が無ければ生産そのものがなされず、それを他国に依拠することは経済の生命線を他国に任せるのと同じである。いくら大きく近代的工場をたくさん建設しておいても原料や燃料が無ければ意義が無い。

それゆえ大量に要求される原料、燃料をはじめとして基本的なものはみな自国で解決しなければならない。そのためには自国の天然資源を最大限に動員、利用して工業を自国の原料と燃料に依拠するものに発展させなければならない。

自立的民族経済建設と関連して正しく理解しておきたい問題がある。それは自立的民族経済の建設が国際的な経済協力と決して矛盾しないということである。自立的民族経済を建設するということは、閉鎖的経済建設を意味するのではない。自立的民族経済は他国による経済的支配と従属に反対

するのであって、国際的な経済協力を否認するのではない。

経済を発展させるためには、国家間に経済的協力や交流を行わなければならない。とりわけ発展途上諸国が経済的・技術的に互いに緊密に協力することはこれらの国の経済的自立を保障し、経済力を強化するうえで重要な役割を果たす。

今、発展途上諸国は帝国主義者の侵略と略奪政策に反対して国の自主権と天然資源を守り、古い経済秩序をなくして新しい公正な国際経済秩序を打ち立てるために頑張っている。発展途上諸国は、自主という共通の目的のためにたたかっており、また、多くの人的、物的資源、いろいろな良い経験と技術も持っている。それゆえ互いに緊密に協力すれば、発展した諸国の「御陰」を被らずにも、優に経済をうまく建設していくことができる。

各国はしっかりとした自立的民族経済を建設し、それに基づいて平等な立場で経済協力を行わなければならない。

自立的民族経済を建設することこそすべての国と民族がいかなる経済的支配と従属も受けずに富強・繁栄を遂げうる、もっとも正しい道なのである。

4) コソボ戦争の教訓

1999 年 3 月 24 日、アメリカとナトーによって起こったコソボ戦争は 78 日間も続いた。この戦争期間にナトーは2千発あ

まりの巡航ミサイルを発射し、1200機あまりの飛行機を2万5千回以上も出撃させ、無差別的空襲を敢行した。

こうしてほぼ2千名の無辜の平和的住民が死に、6千名が負傷し、100万名以上が避難民となる結果を産生させた。旧ユーゴスラビアでは約1000億USドルの物質的・文化的損失をこうむった。ついには帝国主義者に屈服して、彼らの「ランブイエ計画」通りにコソボの自治を認めてそこから撤収することにより、帝国主義者たちが凱旋将軍のごとくユーゴスラビアに足を踏み込むようになったのである。

反帝闘士として仰がれていた以前大統領ミロシェビッチまでも戦犯者に追い詰められて国際裁判所の被告席に座るようになり、しまいには拘置所で死亡した。

コソボ戦争は力には力で対抗し、そのためには自分を守りうる国防力を建設しなければならないということを教えている。

自分を守ろうとするのは人間の本性である。しかし自分を守るためには力を持っていなければならない。力が無ければ他人に見くびられ抑えられる。

国家間の場合も同じである。自国の力が強くてこそ他国からも軽視されず、人民の安全を守ることができる。

ユーゴスラビアは1万2千ｍの高さで爆弾を落とす敵の飛行機と300㎞離れた敵の空港、周辺海域であるアドリア海に停泊したアメリカ軍の空母をはじめ、軍艦を打撃する対空武力とミサイルを持っていなかったため、一方的に打撃され、敗

北してしまった。

アメリカとナトーによって強要されたコソボ戦争でユーゴスラビアが取った対策は、ただ防御であった。ユーゴスラビアは持っている対空システムを利用してアメリカとナトーの空襲に対応し、15 万名の地上軍を準備させて敵が地上に武力を投入できないようにはした。

コソボ戦争の期間ユーゴスラビアの人々はアメリカとナトーの空襲を浪漫的なユーモアでからかったり、「人間の盾」で対抗したりもした。彼らはサイレンの声を「セルビアの民族管弦楽」といいながら対空砲射撃をする軍人たちを励まし、橋と建物をはじめ必要な対象は互いに手をとり、腕を結んで囲んでアメリカとナトーの空襲から守ってみようともした。

しかし、それは敵に何の刺激にもならなかった。結局、アメリカとナトーをはじめとする帝国主義者たちは、軍事施設は言うまでもなく工場や都市、学校と病院、ひいては走るバスや救急車、避難している行列にまでミサイル攻撃と無差別攻撃を加えて多くの平和的住民を殺害したのである。

もし旧ユーゴスラビア軍が、自分の強力な攻撃力を備え、積極的対応をしたなら、あれほどの悲惨な被害は避けられたであろうし、国の自主権も守りぬくことができたであろう。

それゆえユーゴスラビアのある高位級人物は「われわれはこのたびの戦争を通じて自衛的国防力を強化しなければならない必要性を切実に感じた。周辺諸国がナトーに合流し、

固く信じていたロシアまで助けてくれないのを見て胸を打った。結論は、第一も、第二も自国の軍事力を強化しなければならないということである。この道だけが生きる道である」と言っている。

拳が弱ければその拳で涙を拭うしかないという言葉がある。この言葉は自分を守る能力が無ければ悲惨な運命しか与えられないという深刻な教訓を与えている。

人民大衆の運命を開拓するための闘争は、帝国主義者とあらゆる反革命勢力との、力の対決を伴う厳しい闘争である。

そもそも帝国主義者は侵略と略奪をその本性としており、強権と力はその重要な手段である。力で他国、他民族を圧殺し、世界を支配しようという帝国主義者の本性は今日、より露骨になっている。

アメリカ帝国主義は大きな国にたいしては手出ししないで、自らの言葉に従わない小さな国に対しては容赦なく軍事的侵略を敢行する。アメリカがナトーを主導してユーゴスラビアを空襲の対象と決め、コソボ戦争を起こしたのも、この国の軍事力が弱かったからである。

国と民族の自主権を守り人民大衆の運命を守るためには必ず国防力を強化しなければならない。

他国の力に頼ってではなく、必ず自国の力で国を守るという立場で、自国の国防力を建設しなければならない。

言い換えれば自国の力で国を守りうる強力な国防力を建

設し、国防建設と軍事活動において提起されるすべての問題を自国民の利益と自国の実情に即して解決していく立場を堅持しなければならない。

これは自主独立国家建設の根本的原則である。帝国主義が依然として存在する限り、その侵略から自国を守りうる自衛的国防力を持たなければ、領土や人民はいても、事実上完全な自主独立国家であるといえない。

自衛的軍事力を強化するためには、なによりも軍隊を強化しなければならない。

帝国主義者たちが軍事的手段を万能に考え、それを振りかざしている状況下で軍隊の重要性はもっと大きくなっている。現在、世界を制覇しようというアメリカの強権と専横、一方主義は極度に達している。アメリカは強大な力を持っているアメリカがなぜ他国の顔色を見なければならず、国際機構や国際条約の拘束を受けなければならないか、という傲慢無礼な論理を立て、既成の国際慣例や国際法、国際条約もみな反故にしている。また、国際的安定と不安定もアメリカの利害関係を基準にして評価し、アメリカの「国益」に合わないと思われれば世界のどこでもためらい無く武力干渉をおこなっている。

国と民族、社会主義の運命をしっかりと守りぬくためには軍隊を強化することを基本に押し立てるべきである。

全人民的、全国家的防衛体系を打ち立てることは、自衛的軍事力を建設するうえで重要な意義を持つ。

現代戦は前線と後方の区別が無い、立体戦である。

朝鮮は領土も小さく、三面が海に囲まれている。朝鮮半島で戦争が起こる場合、アメリカ軍が一挙に占領しようと空と陸、海から同時に飛び掛ることは決まっている。

こういうことから軍隊を強化し、全人民が武装し、国のいたるところに要塞を構築しておかなければならない。そうしてこそいかなる大敵が空と海、陸のどこから侵してきても立ち向かって退けることができるのである。

全国を小汪清のように作ろう！

これが偉大な金日成主席の構想であり、金正日総書記の決心であった。

抗日武装闘争の初期、朝鮮革命は小汪清遊撃区の広くない地域に凝結していたといえる。日帝は各方面から 5 千人あまりの精鋭部隊を動員して 90 日間もあくどい「焦土化作戦」を敢行した。そのとき遊撃区には武装した人数が 2 個中隊しかいなかった。

戦闘技術機材の差は言うまでも無く、武装した人数からしても対比できない状態で、困難な闘争を行い最後まで遊撃区を守りぬくことができたのは、金日成主席が提示した独創的な全人民的な防衛システム確立に関する思想があったからである。

軍隊と人民は敵の兵器を奪って自らを武装し、遊撃区の各所に防御施設を構築しておき、敵が襲うときには軍民の団

結した力で決死戦を行った。老人や子供たちまでも奮い立ち、命をかけて戦った。結果、日帝が飛行機と大砲を使ってたやすく消滅できるだろうと打算した小汪清遊撃区は、さらに力強く前進する革命の大地、幸せの揺籃として固く守られるようになったのである。

金正日総書記は先軍の旗のもとに革命を導く全期間、全人民を武装させ、全国を要塞化するためにエネルギッシュに活動した。

今日、朝鮮は軍事が全国家的、全人民的な事業となっており、全人民が軍事を誠実に学ぶことにより、片手にはハンマーと鎌を、片手には銃を取って、いったん敵が侵すならいたるところで侵略者を消滅できるようになっている。

新世紀に入って 2002 年の偉大な金日成主席の生誕 90 周年と朝鮮人民軍創建 70 周年、2008 年の共和国創建 60 周年、2011 年 9 月の共和国創建 63 周年、2013 年 9 月の共和国創建 65 周年の時に人民防衛武力の閲兵式が行われた。これらの閲兵式は、敵がどこから攻めてきても自力で撃滅できるように強化された朝鮮人民軍の側面部隊の不敗の威力を示威するものであった。

朝鮮は前線と後方、海岸沿線と内陸地帯を問わず、全国が要塞化され、それも近代戦の要求と地形条件にふさわしく、しっかりと構築されている。

これにたいしては敵も認めている。以前南朝鮮駐屯米軍

司令官はある新聞記者との会見で、米軍が旧ユーゴスラビアとのコソボ戦争のとき、朝鮮半島の有事の際を仮想して初めてステルス戦略爆撃機「B－2」を動員して地下の深部まで打撃するという最新レーダ誘導爆弾「バンカー・バスター」の効果を実験分析した事実を告白しながら、しかし北朝鮮ではこうした爆弾もその威力を発揮することができないだろうといったことがある。

国防工業は自衛的軍事力の物質的裏づけである。

自国の国防力があってこそ兵器と戦闘技術機材を生産して軍隊と全人民を武装させることができる。国防工業を外部勢力に依存しては自国の実情に即して必要な時期に要求される武装を補充することができず、装備したとしても武装力に対する秘密を守ることができない。現在、帝国主義者たちは武器をえさにして他国を従属させようとする。結局、国防工業を他国に依存しては自国を防衛することができない。

現代戦は、自国で武装を充分に生産保障することを要求する。現代戦には以前と比べようもなく膨大な量の兵器と軍事装備が動員される。

これは弾薬だけを見てもよく分かる。第 2 次世界大戦のとき、一般兵種集団が攻撃作戦を行うとき一日に平均弾薬が 1200t 消費されたとすれば、今日の戦争では一日に弾薬を 4000t 消費すると推算されている。第 4 次中東戦争の時、シリア軍がイスラエル軍に対処して反攻撃をするとき、ある師団は、

1500 の砲で 55 分間砲兵準備射撃をしたが、砲弾を約 10 万 5000 発打ったという。アメリカは 1991 年にあった湾岸戦争の 40 日余りの間に、太平洋戦争 14 ヶ月の間に出動した飛行機数の 11 倍にも達する飛行機を動員させ、ベトナム戦争の 9 年間に投下した爆弾の 1.5 倍に達する 8 万 8500t の各種の爆弾を投下したという。

弾薬だけでもこうであるからほかの兵器と軍事装備については言うまでも無い。多くの軍需物資を円満に保障するためには、自国の強力な国防工業を建設するのに最大の力を入れるべきである。

自立的な国防工業が無ければ、現代戦を行うことができず、自力で自国を守ることができない。

朝鮮人民は勤倹節約しながらも自国の国防工業を発展させるために力を入れてきた。その結果、いかなる大敵も一撃の下に退けうる強力な攻撃手段と防御手段を揃えるようになった。

先軍の道で朝鮮人民が建設した国防工業の威力について、外国の人々も感嘆を禁じえなかった。

帝国主義が地球上に残っている限り、自衛的国防力を強化する事業は、今日も明日も、恒久的にとらえて行かなければならない。

国と民族の富強・繁栄を望むなら、いかに困難であり難しくても自衛的国防力を建設しなければならない。国と民族の興亡盛衰の根本的裏づけは、ほかならぬ自衛的国防力にある。

「創造的方法を具現し、革命と建設におけるすべての問題を人民大衆の創造力に依拠し実情に即して解決するのは、つねに革命運動で堅持すべき原則です」

金 正 日

2. 創造的方法を具現して

国と民族の運命を切り開く正しい道を歩むためには、自主的立場とともに創造的方法を具現しなければならない。

創造的方法は自然と社会を改造するたたかいにおいて、人民大衆の力を信じ、彼らを奮起させて提起されるすべての問題を自国の実情にふさわしく解決していく方法である。

創造的方法は自然と社会を改造し、自らの自主性を実現するための人民大衆のすべての活動が創造的活動であるということから流れ出るものである。言い換えれば人民大衆のすべての活動は創造的活動であるため、創造的方法を具現してこそ国と民族の運命を成功裏に改造することができ、歴史を前進させることができる。

創造的方法を具現するための原則は、二つの内容をこめているが、その一つは人民大衆に依拠する方法であり、もうひとつは実情に即して行うことである。

今からその二つの方法について見ることにしよう。

1）人民の中へ

世界の進歩的人民の中で大きな反響を呼び起こし、広く

愛読されている偉大な金日成主席の回顧録「**世紀とともに**」の第一巻には次のように記されている。

「**革命家はつねに、人民を信頼し人民に依拠すれば百戦百勝するが、人民に見捨てられれば百戦百敗するという真理を生と闘争の座右の銘とすべきである**」

国と民族の運命開拓におけるすべての問題を人民大衆に依拠して、すなわち人民大衆の創造的知恵と力を引き出して解決していくとき、その国、その民族は百戦百勝する。これは人民とともに一生涯を歩んできた偉大な金日成主席だけが打ち出しうる、国と民族の運命開拓の絶対的真理であり、この真理はチュチェ思想が明らかにした創造的方法の重要な内容をなす。

偉大な金日成主席は「**人民の中へ入ろう！**」というスローガンを全生涯にわたる座右の銘とし、人民の中に入り、人民に依拠して革命を導いてきた。

主席はその人民の中で人類の心をとらえたチュチェ思想の偉大な真理を発見し、その人民に依拠してアメリカと日本という二つの帝国主義を打ち倒してチュチェの社会主義朝鮮を立ち上げ、その人民のために人民大衆中心の社会主義強国を建設したのである。

主席の歴史は人民への愛と献身の歴史であり、人民に依拠して勝利だけを刻んできた百戦百勝の歴史であった。

「**人民の中へ入ろう！**」このスローガンは偉大な金日成主席

の座右の銘であったと同時に金正日総書記の確固たる生活信条であった。

人民を恩師と、天とみなす指導者、人民を信頼しその力と知恵を引き出して国と民族の運命を切り開いていく偉大な指導者だけがこのスローガンを座右の銘として具現していくことができる。

人民の中へ入るということは、人民の心の中に入るという意味である。

人民は自分たちを国と民族の運命の主人、歴史の創造者とみなし、いつも自分たちを訪ね、運命を共にする偉人にのみその心を打ちあけ、従うのである。

偉大な金正日総書記は、休息日にも、祝日にも、三伏の暑さにも、大小寒の寒さにもこだわりなく兵士たちと人民のいる所を訪ねた。

1996年11月のある日、金正日総書記が島の防御部隊を視察するために埠頭に到着した時、天候が悪くて海はたいへん荒れ狂っていた。西北風が強く吹きながら大きな波は気勢を上げていた。

同行した一幹部が「最高司令官同志、このような天気には絶対に快速艇に乗れません」と申し上げた。

総書記は「絶対に…」と彼の言葉を繰り返しながら、狂乱する海の模様を見つめた。

同行したほかの幹部たちも総書記に波が少し静まる時ま

で待ってから発つことを請願した。

　このとき総書記は低いが力のある声で、私たちは今まで追い風に帆を付けて来たのではない、といいながら先に小さな快速艇に乗るのであった。

　枯葉のような快速艇がいかに荒波に翻弄されたなら、それに乗っていたカメラマン、撮影家たちがあっちこっちへと揺られる中でカメラまで壊してしまい、この時の場面を一こまも収めることができなかったと言おうか。

　このように総書記はいつも兵士たちと人民を訪ね、彼らの中にいた。それで総書記が出向いた所では世人を驚かす奇跡と偉勲が創造され、総書記に出会った平凡な人々は時代の先駆者となり英雄となった。

　総書記の心中にはいつも人民がおり、人民の心にはいつも総書記がいた。

　人民のために自分の一生を、ろうそくのように燃やし尽くした人民の指導者！それゆえ偉大な総書記の一生涯、不世出の偉人たちの一生涯は人民という二つの文字に含蓄されているのである。

　世界は偉大な主席が育成し、総書記が愛したその人民が、今日は敬愛する金正恩同志の周りに固く結集して山岳のように立ちあがっているのを見ている。

　金正恩同志は、偉大な大元帥たちが一生涯歩んできた人民愛の道を変わりなく歩み続けている。

「すべてを人民のために、すべてを人民大衆に依拠して！」

このスローガンは敬愛する金正恩同志が 2013 年の新年の辞で提示したスローガンである。これには全社会に人民にたいする愛と信頼がみなぎるようにしようという、金正恩同志の意図が込められている。

金正恩同志は人民にたいする愛と信頼できびしい難局を打開し、人民に依拠して祖国繁栄の新しい全盛期を開いている。

アメリカ帝国主義をはじめとする敵対勢力とその追随勢力の反共和国制裁決議騒動、北侵戦争演習騒動で朝鮮半島に戦争前夜の超緊張状態が醸成されていた 2013 年 3 月、敵は国連制裁で朝鮮を脅かす一方、朝鮮西海に熱核戦争を行って余る核航空母艦をはじめとする核武装装備、自らの追随諸国の軍隊まで集結させ、狂乱的な戦争演習を行い、朝鮮を包囲、圧殺しようとした。

戦争か平和か。

この厳しい時期に敬愛する金正恩同志は、敵の銃口が狙っている西南前線の最南端の最大のホット・スポットである島の防御部隊を再び訪ねた。そこはいつ戦争の砲声が響くか、いつ熱核戦争の海に変わるか知らない、最も危険な地域であった。

こんな危険な所を、一身の危険はまったく気にせず再び訪ねた金正恩同志の姿を世界は見た。

それは国の自主権を守り人民の幸せを花咲かせるための道であるなら、一身の危険も、苦労もお構いなく一生涯を歩み続けてきた大元帥たちの姿そのままであった。

金正恩同志は部隊の指揮官や兵士たちと会っては彼らの敵撃滅の意志と勇敢さも激励し、兵士たちや軍人家族たちとも一緒に記念写真を撮影した。だけでなく、平凡な一軍官の家に立ち寄った金正恩同志は、去年の視察の際に会ってみたチョン・ハンミョン子供の出生一周年がちょうど昨日であったことを知ってきたといいながらプレゼントまで用意して渡したのである。

島を発つ敬愛する金正恩同志を見送る兵士たちと人民の姿もまた世界を感動させた。

万歳を叫びながら冷たい海の中にまで入って見送る兵士たちと人民の目からは熱い涙がながれていた。

世界はかれらの心に敬愛する金正恩同志と一緒ならどこまでも行くという、信念の誓いがみなぎっているのを見た。

偉人の手元で英雄的な人民が育てられる。

偉大な領袖、偉大な人民が今日の朝鮮を支えている。

朝鮮の現実は、人民大衆に依拠するとき、歴史のあらゆる挑戦をも果敢に打ち破りながら国と民族の自主権を守り、民族の隆盛繁栄を遂げることができるという真理を確証した。

人民大衆に依拠して国と民族の運命を切り開くうえで重要なことは、大衆の要求と志向を反映して正しい路線と政策

を打ち立て、それを大衆自身のものとすることである。

人民大衆は、あらゆることの教師である。人民大衆の自主的な意志と要求を集大成し、体系化すれば思想になり、路線と政策になるのである。

主席は人民の中に哲学もあり、経済学も、文学もあるといいながら、一生涯人民を自分のまたとない教師として押し立て、つねに人民の中に入って彼らの意見を聞き、いい案は手帳に書いておいてから党中央委員会に報告し、討議して党の路線と政策に決めたのであった。

人民大衆の要求と志向に即した路線と政策を打ち立てた後はそれを人民大衆自身のものとするのが重要である。

いくら正しい路線と政策も人民大衆が把握し、彼らが自分自身のものとして受け入れなければ何のためにもならない。路線と政策を人民大衆自身のものとするためにはいろいろな組織政治活動が必要である。一言で言って、国家のすべての路線と政策は人民大衆の中から出て、また人民大衆の中に入らなければならない。そうしてこそ人民大衆の尽きない力を国と民族の運命開拓のために奮い立たせることができる。

解放後朝鮮で土地改革をしていたときのことである。その時までの土地改革の経験といえば、政権を握った人民大衆が土地を国有化した事例があっただけであった。それで一部の人は人民の要求と志向は考慮せずに土地を国有化しなければならないと考えた。

金日成主席はみずから農村に出向き、農民たちとひざを交えて彼らの意思と念願を詳しくお聞きした。自分の土地で農事をするのが農民たちの生涯の念願であることを見抜いた主席は「**土地は耕作する農民に！**」というスローガンを提示し、土地改革を実施する具体的な方法も農民たちの意思と要求に従って決めた。このように農民たちの要求と志向にかなった土地改革の方針を打ち立てた後には、また土地改革を農民たちが主人となって行うようにした。

多くの国で土地改革が紆余曲折を経ながら長い期間にわたって行われたが、朝鮮では農民たちの世紀的念願を反映した土地改革方針を打ち出し、それを農民たち自身の活動に転換させた結果、この活動がわずか20日あまりの短い期間で成功裏に遂行されたのである。

人民大衆に依拠して国と民族の運命を切り開いていくうえで、大衆をひとつの政治的勢力に結集させ、人民的活動作風を確立して彼らと生死苦楽を共にすることがまた重要である。

大衆の力は団結にある。人民大衆はひとつに固く団結したとき、国と民族の運命開拓のための闘争で驚くべき力を発揮することができる。大衆を一つの団結した勢力に打ち固め、人民的活動作風を確立して大衆と生死苦楽をともにすることがいかに重要であるかはレーニンの指導の下に勝利した社会主義10月革命を通じてもよくわかる。

レーニンは資本の支配と抑圧に反対し、ツァーリ専制制度

を憎む労働者階級をはじめとする広範な人民大衆を一つの政治的勢力に団結させ、彼らを真の人民の国を建設する社会主義革命へと奮起させることにより社会主義10月革命の勝利をもたらし、人類史上初めて社会主義国家を誕生させたのである。

つねに人民を信頼し人民に依拠するとき、その人民は国と民族を頼もしく支える柱、推進力となり、そのような人民を持つ国は強盛・繁栄するであろう。

2） 自分固有の方式が第一

1980 年 8 月の末、偉大な金日成主席は朝鮮を訪問したヨルダン民族諮問理事会委員長アッタラウナを団長とする代表団を会見した。主席に出会った大きな喜びに激情を禁じえずにいた委員長は、世界に社会主義を建設するという国は多いが、朝鮮の社会主義こそはチュチェ思想を具現した社会主義のモデルであると申し上げた。

主席はそれに謝意を表し、両国が帝国主義に反対し、自主性を守る原則的な立場で固く団結し、互いに協力していく上で提起される諸問題について話を交わし、今後も朝鮮はチュチェ思想の旗をさらに高く掲げていくつもりであるといった。

主席は、かつてわが人民の中にも事大主義思想があったといいながら朝鮮が解放された直後のことを回顧した。

そのとき一部の人は主席にどういう方式で新しい社会を建設するつもりであるのかと聞いたという。 主席は彼らにソ連式でも、アメリカ式でもないわれわれの方式で新しい社会を建設すると答えたと言った。

われわれの方式で！

主席はこの日彼らに、西洋人は食事をするときフォークとナイフを使うが、朝鮮人は匙と箸で食事をするといわれた。

パンと肉にはフォークとナイフが似合うが、ご飯と汁には匙と箸が似合うということ、したがって朝鮮革命はそれにふさわしい方法で行わなければならないという意味であった。

実情に即して行っていくことは、チュチェ思想が明らかにした創造的方法のもうひとつの内容である。

金正日総書記は次のように述べている。

「…つねに現実から出発し、すべての問題を実情に即して創造的に解決していくべきです」

実情に即して行うということは、国と民族の運命開拓におけるすべての問題を変化、発展する現実と国の具体的条件にふさわしく創造的に解決していくことを意味する。たやすくいえば、すべての問題を自分固有の方式で解決していくという意味である。

国と民族の運命開拓をめざすたたかいでは外国の方式ではなく自国の方式が一番いい。

すべての国と民族は歴史や経済の発展水準、自然地理

的条件、人々の意識水準と心理、風習と生活方式がそれぞれ異なる。また、国や民族の置かれた国際的環境も異なる。

ヨーロッパとアジア、アフリカ、ラテン・アメリカが自然地理的条件や政治的・経済的状況においてそれぞれ異なるのはもちろんのことであり、同じ大陸の中でも各国、各民族は相異なる条件と環境をもっている。

私たちが生活する地球の環境は、春、夏、秋、冬の四季を通じて絶えず変化する。人々は季節にしたがって、服も着替え、生活方式も変えていく。同じように時代と歴史は固定不変であるのではなく絶えず変化し、国と民族の運命を切り開く客観的環境も昨日と今日が違う。今日と明日もやはり同じであるわけがない。したがって昨日の方法で今日の闘争を行えず、今日の方法が明日にも合うはずがないのである。

それゆえすべての国と民族に一律的に当てはまる処方などありえず、いかにいい処方であっても万能ではない。

そういうことからして各国と民族が運命を切り開くためには、変化、発展する現実と自国の具体的実情に即して提起されるすべての問題を自分固有の方式で解決していかなければならない。

それでは国と民族の運命開拓におけるすべての問題を実情に即して、自分の方式で解決していくためにはどうしなければならないのか。

自分の方式で解決していくうえで何よりも重要なことは、

既成理論を正しく受け止めることである。

既成理論はすでに過ぎ去った歴史的時期の実践に基づいて打ち出されたものである。それゆえ新しい歴史的条件の下で行われる今日の現実にそのまま適用することはできない。

既成理論に対するうえでそれがどういう時代的要請を反映し、またどういう前提の下で生まれたかを見極め、自国の具体的現実と特性に即して適用しなければならない。

自国の現実に合わない理論はなんの役にも立たない。

既成理論に対する教条主義的態度は国と民族の運命開拓に大きな弊害をもたらす。

日帝に反対する朝鮮人民の抗日革命闘争時期、遊撃根拠地で政権問題をめぐって起こった混乱とその収拾過程は、既成理論に対する教条主義的態度がいかに危険なものであり、すべての問題はあくまでも自国の具体的実情に即して解決していかなければならないということを実証した。

その時、左翼日和見主義者たちは、ソ連のソビエト路線を機械的に真似て、遊撃根拠地にソビエト政権を樹立した。朝鮮の社会発展水準と朝鮮人民の生活感情をまったく考慮せず事大主義者、教条主義者たちは即時的な社会主義の実現という極左的スローガンの下に私有財産撤廃を宣布し、土地と食料から鎌、手ぐわ、フォークなど簡単な農具にいたるまで個人の所有していたすべての動産、不動産を共同所有にしてしまい、遊撃区内のすべての住民が男女老少分かたず

に共同生活、共同労働、共同分配の新しい秩序のもとで動くようにした。左翼的なソビエト施策により遊撃根拠地では収拾しがたい動揺と混乱が生じ、はなはだしくは多くの人々がソビエト施策に不満を抱き、敵の支配地域にいってしまう結果まで生じたのである。これらの混乱の原因は自国の具体的実情を無視して既成理論をそのまま受け入れたところにあった。

こうした混乱は偉大な金日成主席が朝鮮革命発展の具体的条件と環境にふさわしく、独創的な人民革命政府路線を打ち出し、左翼日和見主義者の極左的策動を一掃したことによって克服することができた。

既成理論にたいする教条主義的態度を排撃するからといって今日の現実でも意義のあるものをやたらに否定してはならない。しかしこの場合にも、昨日もそうであったから今日も必ずそうなるといったふうの考え方は間違っているということである。こうした思考方式は絶えず変化発展する今日の現実と革命闘争の創造的性格に合わない。

国と民族の運命開拓におけるすべての問題を実情に即して、自分固有の方式で解決していくうえで重要なことは、次に時代的条件と自国の具体的実情に即して運命開拓の新しい原理と方途を積極的に探求することである。

時代は、同じ所に留まっているのではなく、絶えず前進する。変化、発展する今日の時代は、その解決を待つ切実な、新しい理論的・実践的問題をたくさん産生させている。

例えば、冷戦の終息とともに挫折した社会主義運動をどのように再生させるべきか、情報産業の発展とともに肉体労働者の数が減り、インテリの数が増えている状況のもとで革命勢力をどのように編成すべきか、日増しに横暴になっている帝国主義者の「グローバル化」策動にどう対処すべきか、さらに深刻になりつつある環境問題を人類はどのように打開していくべきか等、新たに解決すべき問題がたくさん提起されている。

ではこうした問題の解決方途は何か。

新しいものの価値は新しい尺度でのみ測ることができるように、新しい問題は今日の時代にあう新しい原理でのみ解決することができる。

したがって諸国の人民が自国の具体的実情から出発して新たに提起される問題を解決するための原理と方途を絶えず探求し実践に適用していかなければならない。

偉大な金正日総書記は革命指導の全期間、現代が提起する理論的・実践的問題を解決しうる新しい原理と方途で、金日成主義の宝庫をより豊かにし、人類の前途を明らかにした。

金正日総書記が政治史に類例を見ない独創的な先軍政治を全面的に実施し、それを具現した先軍時代の経済建設路線を提示したことは、その確証となる。

先軍政治という言葉はどの政治辞典にも、どの国の政治史にもない言葉である。

しかし総書記は帝国主義者の反共和国孤立圧殺策動に

より、生か死かを決める厳しい情勢の要請と、自主性を生命よりも貴重に考える朝鮮の軍隊と人民の志向にふさわしく、先軍を朝鮮革命の戦略的な政治路線として提示し、不敗の旗じるしとして高く掲げた。

そして先軍政治の要求を具現した国防工業の優先、軽工業と農業の同時発展という先軍時代の経済建設路線を打ち出して、国防力の強化をもっと力強く進めていった。

総書記が時代の要請にもとづいて先軍の旗を高く掲げ、先軍時代の経済建設路線を力強く推進したがゆえに、今日、朝鮮は不敗の軍力を持つ、軍事強国として浮上することができたのである。

国と民族の運命開拓で提起されるすべての問題を実情に即して、自分固有の方式で解決するうえで、他国の経験を批判的に、創造的に対するのが重要である。

民族の運命を開拓するためのたたかいにおいて他国の経験を参考することは一定の意義があるといえる。

問題は人の経験をどのように参考するかということである。人の経験はあくまでもその国の具体的状況下で創造されたものである。そのためその国で生命力と優位性が実証されたとしても、必ず自国にも当てはまるのではない。他国の経験には自国に必要で有益なもの、自国の実情に合うのもあれば、そうでないものもある。

それゆえ、他国の経験を批判的に、創造的に対しなけれ

ばならない。一般的に人々は食べ物を食べるとき、味わってみて胃が受け入れれば飲み下し、そうでなければ吐き捨てる。同様に他国の経験を学ぶそれ自体に反対するのではなく、学ぶにしても食べ物を食べるときのように自分の方式で食べなければならないということである。

自国の具体的実情は考慮せずにやたらに外国の経験をそのまま受け入れては成果を期待することができない。

何の考慮も無く帝国主義者が喧伝する「グローバル化」を教条的に受け入れた国々がどうなったかを見よう。

そもそも「グローバル化」は、徹底的にアメリカを世界の「唯一のリーダー」に押し立て、アメリカとそれに従属された資本主義列強が世界を左右する新植民地主義的国際秩序を樹立することにその目的を置く、アメリカの支配主義戦略として、他国と民族、とりわけ発展途上諸国には「いい処方」になるはずがない。

帝国主義者があれほど大げさに広告した経済の「グローバル化」だけを見てもそうである。

帝国主義者たちは、世界のすべての国が市場の門戸を開くことにより自分たちが自由に投資し、制限なく商品の輸出と輸入ができるようにすることを要求している。ここで損するのは発展途上諸国だけである。

各国には、自国の実情にあう経済構造と経済管理方式があり、したがってそれにあう経済発展戦略と目標を立てて推

進させなければならない。それだけが自国民の力と知恵を正しく発動して経済を発展させていけるいい処方である。

発展途上諸国には自国の実情に即した経済構造と経済秩序、貿易環境が必要である。これを無視して「グローバル化」へと進むなら、自国固有の経済方式と構造を失い、発展した西側の完全な経済植民地に転落してしまうであろう。いくら市場の門戸が開かれて経済貿易の「グローバル化」が実現されるとしても、発展途上諸国が発展した国々と競争することができず、ここで生き延びることができないということは明らかである。

実際、先進的な工業諸国は発展途上諸国の主要輸出品にたいして引き続き関税および非関税障壁を作っており、発展途上諸国の「債務免除」だの「技術援助」だのという聞き栄えのいい提案を持ち出しながらも、それに政治的・経済的付帯条件をかけている。彼らは発展途上諸国の関心事については論議さえ憚り、金融業のように自らの利得が見込まれる分野に限っては「自由化」を主張している。

まさにその金融の「グローバル化」が1990年代の末、ついには東南アジアを破局的な経済危機へと追い込んだことを私たちははっきりと覚えている。

アメリカは病気にさせて薬を与えるような方法で、危機と混乱をなめている東南アジア諸国など、発展途上諸国に対していわゆる「支援」と「協力」を標榜しながら、これらの国を自ら

の「援助」のわなにもっと深く押し入れようと画策している。「グローバル化」は帝国主義者たちが喧伝するように問題解決のいい処方でもなければ、いい薬でもない。それは発展途上諸国の財政金融および貿易、文化、保健など社会生活のすべての分野で厳重な破壊をもたらし、失業の爆発的な増大を生んだ。また、発展した諸国と発展途上諸国間の経済発展水準での差、物質的富での差を激化させ、各国の固有の民族的伝統と慣習まで無くしてしまう。

「グローバル化」に巻き込まれた国々でのように提起される課題と難関を解決する上で自国の実情に即した方途を探そうとはせずに、他国の方式を頭から真似ようとするなら失敗と紆余曲折を逃れることができない。

提起されるすべての政治的・経済的難関の前で自国の実情にあう具体的方途を探し、自分固有の方式で克服していこう。

自分の方式！これよりもっと立派で有力な方式は無い。

政治も、経済と文化も自国の方式で発展させ、国防も自分固有の方式で強化していこう！

すべてを自分の方式でやっていくとき、他人が患う熱病にもかからず、他国がなめている亡国の悲劇も知らずに自民族の隆盛・繁栄を遂げていくことができる。

「革命運動において人民大衆の自主的な思想・意識は決定的な役割を果たすため、革命と建設では必ず思想を基本にとらえ、人民大衆の自発性と積極性を高めるための思想改造、政治活動をすべての活動に優先させなければなりません」

金 正 日

3. 思想を基本にとらえて

チュチェ思想は国と民族の運命開拓において思想を基本にとらえていくべきであると教えている。

これは人々を国と民族の真の主人に育てあげ、彼らの役割を高めて民族の隆盛・繁栄を遂げていくための原則である。

思想・意識は自主性をめざす人民大衆の闘争において決定的役割を果たし、すべての革命運動は人民大衆の目的・意識的な運動である。それゆえ国と民族の運命を成功裏に切り開くためには、必ず人々の思想を基本にとらえていかなければならない。社会的・歴史的運動の推進力である思想・意識をとらえずに革命と建設を行うというのは、推進機の無い船に乗って大海原を渡ろうとするのと同じである。思想を基本にとらえていく原則は二つの内容を持っている。一つは思想改造を優先させることであり、もうひとつは政治活動を優先させることである。

思想改造を優先させることが主に人間自身を高い思想・意識を持つ有力な存在に育成する事業であるならば、政治活動を優先させることは、人々の心を動かし彼らを奮起させて提起されるすべての問題を成功裏に解決していくための事業である。

1） 思想活動を優先させて

2010 年、メキシコ・チュチェ思想研究所では偉大な金正日総書記の著作「**思想活動を優先させるのは社会主義偉業遂行の必須の要求である**」の発表15周年に際して、会誌「思想活動を優先させて」を発行した。

会誌は「思想的一色化を実現して」という見出しで次のように書いている。

「金正日総書記は、社会主義朝鮮の始祖である金日成主席が創始したチュチェ思想に基づき革命と建設で決定的役割を果たすのは人民大衆であり、彼らを思想的に目覚めさせ、奮い立たせる時、不可能なことが無いという信条を持っている。総書記は、社会の全構成員を社会主義思想で武装させて全社会の思想的一色化を実現することを思想活動の基本任務とし、力強く導いた。朝鮮人民が体している高い精神力と彼らの中で発揮されている高尚な思想的・精神的風格は、ほかならぬ思想教育の生命力を見せるものである。朝鮮では指導者を中心にして全人民が一心団結し、全社会が一つのむつまじい大家庭を成して、誰もが信念と楽観に満ちて働き、生活している」

著作は発表されてもう久しい。しかし宝石が土の中に埋まれてもその光を失わないように、歳月の流れが決して偉大な

思想を人々の心からなくすことはできない。かえってその科学性と真理性をより浮き彫りにする。

金正日総書記は著作で次のように述べている。

「人々を社会主義思想で武装させることは、思想分野における新しいものと古いものとのたたかいであり、人々の頭のなかにある古い思想をなくし、新しい社会主義思想で武装させる思想改造の事業である」

国と民族の運命を成功裏に切り開くためには、思想改造をすべての活動に優先させなければならない。

それは国と民族の自主権を守り、強盛・繁栄する国家を建設するためには、まず人間を国と民族の真の主人に育てなければならないからである。

国と民族の運命開拓において決定的役割を果たすのは人間である。政治・経済強国を建設するのも、科学と技術を発展させるのも、先進的な文明国を建設するのも、国と民族の主人である人間であるため、人間を育成することが何よりも重要である。

もし人々が国と民族の主人であるという自覚に欠けているなら、思想的に腐敗、堕落して働くことを嫌がり遊んでばかりいるなら、その国と民族の将来はどうなるだろう。

人間を国と民族の真の主人に改造する活動を抜きにしては、国と民族の自主的発展と明るい未来について考えることができない。

しかし人間を改造するにはその思想から改造しなければならない。人々を国と民族の運命開拓をめざす闘争において自分の責務を全うする力強い存在に育て上げるためには、彼らが先進的な思想と高い科学技術知識を身につけ、壮健な体力を持つようにすべきであるが、ここで最も重要なのが思想である。

人間改造は本質において思想改造である。

思想改造は人々の頭に残っている古い思想を根こそぎにし、彼らを自主的な思想・意識で武装させる活動である。

人間は正しい思想を身に付けてこそ、国と民族のためにもっと多くの知識を所有しようと頑張るようになり、自分の知識を自分ひとりのためではなく、祖国と人民、人類のために有益に使うことができる。しかし思想が悪ければ、かえって知識が禍の種になりうる。第2次世界大戦の時、ドイツと日本の反動的学者たちが、人間を大量殺戮する方法を生きた人間を対象にして研究したということはもはや秘密ではない。これは正しい思想を持たなければ知識が人類の発展を妨げ、人民大衆の自主性を蹂躙するのに利用されるということを見せている。

このように人間を改造するうえで思想改造が基本である。

それゆえ思想改造を優先させるとき、人民大衆の尽きない創造力を最大限動員して提起されるすべての隘路と難関を克服しながらまっすぐに前進していくことができるのである。

思想改造を優先させることは社会主義社会においてより

重要な問題として提起される。

社会主義制度の誕生と存在、その発展は自主的な思想・意識で武装した人民大衆を抜きにしては考えられない。資本の支配に反対してたたかう勤労人民大衆の階級的要求を反映して社会主義思想が生まれ、その思想で覚醒された人民大衆の闘争によって社会主義制度が誕生し、発展する。

思想の力によって、社会主義思想で武装した人々の意識的な活動によって発展する社会だというところに、社会主義社会の本質的特性があるのである。

したがって思想改造を行って人々を思想的に準備させることは、社会主義の運命、その発展がかかっている重要な問題である。

社会主義建設において思想改造をないがしろにすることは社会主義の基本を失うことになり、これは必然的に社会主義の変質と崩壊へとつながるのである。

旧ソ連をはじめとする東欧社会主義諸国の崩壊がこれを実証している。

これらの国で社会主義が挫折した重要な原因の一つは、社会主義建設において思想改造を軽視したところにある。

当時、これらの国では客観的な物質的・経済的条件に決定的意義を付与し、経済建設にのみ集中しながら人民大衆の思想改造には相応の関心を払わなかった。そうする中で人々の中では社会と集団のために献身する集団主義精神が

発揮されず、個人の利益と安楽な生活を追求する個人主義が蔓延するようになった。

1982 年に旧ソ連の耕地面積の14%に該当する自留地でのジャガイモと果物、卵類、肉の生産量が、それぞれ全国生産量の 61%、54%、34%、29%を占めたという短編的資料だけでも当時の人々の思想精神状態がどうであったかを分かるであろう。

人々のこうした思想的・精神的状態と社会的沈滞を背景にして、社会主義の背信者ゴルバチョフは「新しい思考方式」、「社会主義への新しい道」を大げさに唱えながら資本主義を復活させた。

当時人々の思想・精神状態は、いわゆる「新しい道」を提唱するゴルバチョフの本心を見極めないほどに、ごく乱れていた。

ゴルバチョフは、人々の頭の中で社会主義思想の変質過程をさらに促進させた。それで人々は資本主義により魅力を感じ、社会主義制度に対する不平、不満を露骨に言いながら党と国家に対する不信感を隠さず、反社会主義的策動を黙認、追従したりした。

人民大衆が社会主義思想でしっかりと武装すれば、社会主義社会の主体としてその発展を確固と保障し、社会主義偉業を固く守り通すことができるのである。

しかしこれらの国では人民が思想的・精神的に瓦解され

ていたため、社会主義の裏切り者の策動に乗せられ、社会主義を守り通すことができなかった。

こうして人類の志向であり念願であった社会主義が崩壊するような歴史の悲劇を進歩的人民は胸痛く体験したのである。

社会主義はこうして永遠に崩壊してしまうのか。

帝国主義反動層は、社会主義の終焉について喧伝し、社会主義の裏切り者は、社会主義の理念そのものが誤っていたと言った。

絶望と悩みの中で進歩的人民は、社会主義の最後の砦である朝鮮を見た。

この厳しい歴史的時期に偉大な金正日総書記は「**社会主義は科学である**」、「**思想活動を優先させるのは社会主義偉業遂行の必須の要求である**」、「**社会主義にたいする誹謗は許されない**」をはじめとする多くの著作を発表して、社会主義の科学性と真理性、その勝利の必然性について論証した。一時的な難関の前でさまよっていた人類は希望の灯台を発見するようになり、国際社会主義運動は再び自分の軌道に沿って前進しうる、羅針盤を持つようになった。

金正日総書記は共和国に対する早期崩壊説までまわしながら社会主義朝鮮を孤立・圧殺しようとやっきになっている帝国主義反動層の策動を思想の威力で断固打ち破り、朝鮮の社会主義を固く守りぬいた。

総書記は敵の孤立と封鎖、思想的・文化的策動が悪辣に

行われる状況下で、思想分野で全面的攻撃戦を展開して思想陣地をより強化した。

思想陣地が崩れれば強大な経済力や軍事力も役に立たず、社会主義制度も崩壊するに決まっている、軍事的打撃力には限界があるが思想には限界が無く、その威力は原爆よりもっと強いというのが総書記の持論であった。

総書記は全人民に社会主義の正当さと優位性を深く体得させ、社会の主人としての人民大衆の地位と役割を向上させる思想教育をより強化するようにした。

社会主義は守れば勝利であり、捨てれば死である。

これが朝鮮人民の心に根ざした固い信念であった。

社会主義を生命のように考える朝鮮人民は草の根や木の皮で作った代用食料を食べながらも自力更生、刻苦奮闘の精神で機械をまわし、農業を行った。

この日々に朝鮮人民の精神力は百倍、千倍に強化され、全人民は革命を完遂する決死の覚悟と意志で奮い立って、禍を福に、逆境を順境に転換させながら社会主義を守護し、強盛国家建設の跳躍台を築いた。

朝鮮の経験は思想がすべてを決定し、人々を思想的に準備させれば不可能なことが無いということを実証した。

思想改造を優先させることは、決して社会主義諸国に限った問題ではない。

強盛・繁栄と社会的進歩を志向するすべての国と民族は

思想改造を優先させなければならない。

しかし、いまだ一部の国では人間改造、思想改造をおろそかにしながら経済建設一面に偏っている。これらの国では物質的刺激を強化する方法で人々を動かそうとしており、人々の思想ではなく、物質的・経済的要因に優先的な意義を与えている。

世界を動かす力はお金や原爆ではなく、人々の思想である。

思想的・精神的に瓦解された人民はたとえ強力な軍事力を持っているにしても国と民族の運命を救うことができない。

2003 年 3 月、アメリカが起こしたイラク戦争でイラクが数日間で容易く倒れたのは、現代兵器が無いか、不足してではなく、アメリカの巧妙な心理謀略戦にかかって軍隊と人民が思想的・精神的に瓦解されていたからである。

イラク戦争期間、アメリカは 2800 万枚に達するビラを撒き、巨額の資金をかけて放送局を立て、特殊作戦飛行機を動員して毎日のようにそれぞれ異なる 5 の周波数で 17 時間ずつ宣伝放送を行ったという。彼らはビラと放送を通じてサダム政権に反対し、アメリカを歓迎してこそ死を逃れる、アメリカはサダムの「独裁統治」からイラク人を解放して「自由」を与えるために戦っている、との内容で謀略宣伝を行った。これとともにアメリカはイラクの将星たちに各種ルートで接近し、降伏さえすればアメリカの市民証を与え、安楽な生活を保障すると懐柔した。

アメリカはその恩恵をたっぷり被った。イラク軍部の中枢が瓦解して、アメリカ軍を目の前にしているにもかかわらず「抵抗するな」という命令を下し、過半数の将兵たちは敗北主義に陥って無秩序に逃走するなど、完全に滅びてしまった。

またイラク人の中には敵が都市のすぐ近くに来た時までも市場で歩き回り、侵略者を「解放者」のように歓迎する人々もいた。

歴史は、人民大衆の運命開拓をめざすたたかいで思想を捉えず思想改造を優先させなければ失敗を逃れないということをはっきりと見せている。

人々を思想的に覚醒させて彼らを思想と信念の強者に育て上げれば千万の大敵も、苦難と試練も恐ろしくない。

最近年、社会主義朝鮮が世界の「唯一超大国」を自認するアメリカ軍との対決で連戦連勝し、制裁と封鎖、圧力と恐喝がその度を極める最悪の状況下でも強盛国家建設で飛躍を遂げることができたのは、朝鮮人民の不屈の精神力があったからである。

この歴史の奇跡は思想改造を優先させて朝鮮人民を思想と信念の第一の強者として育て上げた、不世出の偉人たちの指導を抜きにして考えられない。

それゆえメキシコ団体は会誌「思想活動を優先させて」という題の記事でこう強調したのである。

「著作が発表された後去る 15 年間、朝鮮が歩んできた道

のりは、金正日指導者の思想理論の正当さを実証するものである。領土も、人口も小さく、それにアメリカによって半世紀以上も民族分断の悲劇を強要されている朝鮮が去る世紀の末、厳しい情勢と試練の中でもいささかの動揺も躊躇も無く社会主義を固守し輝かしてくることができたのは、思想を基本に捉えて、思想活動をすべての活動に確固と優先させてきたからである。社会主義を固守し輝かすための軍隊と人民の不屈の精神力が最大に発揮されて、今日の朝鮮では強盛大国建設で世人を驚かす奇跡が絶えず創造されている。

金正日指導者の著作は朝鮮人民だけでなく社会主義を志向するすべての国の党と人民が必ず捉えていくべき綱領的指針である」

思想と信念が崩れれば人間そのものも無用になり、強大な国も一朝にして崩れてしまう。

しかし百折不撓の思想の力を持った人民がいる国は、たとえ一時的な難関をなめるとしてもその未来は洋々としており、必然的に強盛・繁栄するであろう。

2）端川（タンチョン）港に響き渡る初の船の汽笛

2012 年 5 月 3 日、朝鮮の咸鏡南道の端川地区では端川港竣工式が行われた。

竣工式の後、貿易貨物船「沸流川（ビリュガン）」号が初の汽笛を鳴

らしながら出港した。

　その汽笛を聞く港湾の建設者や竣工式の参加者たちは金日成主席の生誕100周年に当たる太陽節に際して端川港に船の汽笛を鳴らせようと、竣工式にも参加してテープを切ると約束した金正日総書記を思い、目頭を熱くした。

　端川港は過ぎ去った歳月とともに多くのいきさつを抱いているところであった。

　端川港建設は狂乱する海とのたたかい、埠頭の床の高さまで積もっている数百万㎥の砂を掘りあげなければならない、壮大な大自然改造であった。

　朝鮮を占領した日帝は、検徳地区の天然資源を無制限に略奪するために 1930 年代の後半期から端川港建設を始めたが、不利な建設条件からしてその完工を放棄せざるを得なかった。

　朝鮮のマグネシア工業が盛期に上った 1970 年代以降、端川港の建設問題は国の経済を発展させる上で占める重要性からして何回も浮上されたりした。

　端川港を建設すれば、端川地区で生産されるマグネシアと亜鉛を、港を通じて輸出することができる。

　それで該当部門でその建設と関連して数十回の慎重な論議もしたが、毎度現実的建設方途が探せずに終わってしまった。1990 年代の後半期からまた端川港建設問題が提起されたが、多くの人が国の状況からして工事を始めることさえ

考えずにいた。

半世紀以上紆余曲折を経ながらも着手することができなかった端川港建設を直接発案し賢明に導いた方は、金正日総書記であった。

金正日総書記は、端川地区に近代的貿易港を建設し、党とともに苦難と試練を乗り越えながら苦労も多かった朝鮮人民に幸せな生活を保障してあげたいのが私の決心である、2012 年までは端川港で初の船の汽笛が鳴るようにしようと呼びかけた。

そして波の荒い浜辺の工事現場を何回も訪ねて、港湾の建設者を勇敢な海の征服者、英雄であると励まし、機会があるたびに私は彼らを信じている、難しい工事であるが彼らは必ず遣り通すであろうと高い期待も表した。

また、防波堤工事の秘訣も教え、現地で具体的な方向と方途もいちいち示し、港湾建設で提起される問題を優先的に解決するように措置も講じた。

人々の心臓に火をともせて彼らの思想を啓発すれば、この世に不可能なことが無い。

総書記の賢明な指導と温かい配慮、高い信頼は、港湾建設で驚くべきスピードを生み、完工を決定的に早める鍵となった。

端川港の建設者たちは 10 年という既存公式を破って自力で3年間にわたって完遂する大胆な目標を立て、すべての力量を総動員、総集中して荒れ狂う大自然を征服した。科学

者、技術者たちは創造的知恵と力をあわせてわれわれの方式による新しい技術工法を大胆に受け入れ、港湾建設で最も難しく膨大な防波堤と埠頭工事を1年余りの期間で終える奇跡を創造した。潜水工たちは、真冬の海水にもためらいなく飛び込み、地盤固めと基礎部材の組み立てを優先させ、掘進と砂利を引き受けた建設者たちは不利な自然条件を強靭な意志で克服しながら作業のスピードを速めた。こうして彼らは金正日総書記の遺訓どおりに金日成主席の生誕 100 周年に際して端川港で初の船の汽笛を鳴らしたのである。

これは大衆の心臓に火をともせ、彼らを不可能を可能に転換させる世紀的奇跡の創造者に育て上げた金正日総書記の賢明な指導がもたらした偉大な創造物である。

人々の心臓に火をともせること、これがほかならぬ政治活動である。

国と民族の運命を成功裏に切り開くためには政治活動を優先させなければならない。

政治活動を優先させるということは、何のことを行うにしても人民大衆にその目的と意義、方途を教えて、彼ら自身が高い自発性と積極性を持って奮い立つようにすることである。

金正日総書記は次のように述べている。

「革命課題をりっぱに遂行するためには、人びとを教育し奮起させる政治活動をすべての活動に優先させなければなりません」

政治活動は一言で言って対人活動である。言い換えればそれは人々を教育して彼らの思想を啓発させる活動である。

何の事でも人間が動かなければならず、人間を動かせるためにはその思想から動かせなければならないのである。しかし人間の思想は自然に動くのではない。ガソリンやディーゼル油を入れて発動をかけてこそ自動車を動かすことができるのと同じく、思想意識も啓発させてこそ人々の行動を進める作用をするのである。

人々の思想を啓発させるためには彼らの心を動かせなければならない。自然と社会を改造し国と民族の運命を切り開くうえですべての活動の成功いかんは人々の心臓に火をともせて心を動かすことにかかっている。何の事でもどのように決心するかにかかっているという言葉もあるように、人民大衆の心さえ動かせれば、山も移し海をも埋める驚くべき力を発揮することができるのである。したがって人々の心を動かす政治活動を他のすべての活動に優先させることが重要である。

では政治活動をどういう方法で行わなければならないのかについてみることにしよう。

政治活動は何よりも、説得と教育の方法で行わなければならない。

説得と教育の方法で行うということは、何の問題でも人々が自発的に受け入れるように諭して教えるということである。

命令し号令するような方法では人々の心を動かすことが

できない。たとえ命令や号令によって人々が動いたとしてもそれは仕方なく動くのであるため創意性と熱情が出てこない。

第2次世界大戦の時、ソ連軍では24万名の有給政治幹部など、多くの政治活動家が説得と教育の方法で軍人大衆の心臓に火をともせ、彼らを祖国と社会主義を防衛するための聖戦へと呼びかけた。

ヒトラーの最後の牙城であったベルリンの国会議事堂に赤旗を掲げる時の熾烈な戦闘を振り替えてみよう。

当時、この戦闘を受け持ったのはソ連軍第150歩兵師団であった。この師団は後退時期から困難な戦闘の過程を経て最後の突撃線であるドイツ国会議事堂の前まで来ている。国会議事堂の上に赤旗を掲げれば戦争は終わる。すると懐かしい故郷へ、愛する父母妻子が待っている家に帰られる。最後の戦闘だ。兵士たちの心は重かった。指揮官たちでさえ、敵弾が飛んでくれば頭をもたげなかった。

どうすれば兵士たちを最後の突撃戦へ 奮い立たせることができるだろうか。

師団長が直接兵士たちの前に出た。

最後の決戦だ。その間多くの戦友たちがわれわれと死に別れた。われわれは彼らの願いをこめてあの国家議事堂の上にわれわれの旗をかかげなければならない。そうするためには犠牲を覚悟しなければならない。ここまできて他の部隊に旗を掲げてくれというのか。私たちはどんなことがあっても

あの議事堂を占領しなければならない。そういいながら彼は兵士たちに、ある戦闘について想起させた。

兵士たちの答えを聞いた彼は「そのとき戦線1km当たり各種の砲150、戦車40台、6つの飛行大隊が私たちを支援しました。皆さん！皆さんは経験の多い古参兵であるから自分で打算してみなさい。今日、わが師団の攻撃戦線1kmあたり砲が400、戦車が250台、飛行機は要求する量だけ支援を受けることができます」

兵士たちはこの密度が何を意味するのかを分かっていた。そして党と祖国が自分たちをどれほど愛するかを心から感じた。そしてこの打撃力の前で生き残る敵はいないということも肉感で感じた。

「師団長同志、早く命令をください。そんなやつ一気で遣り通しましょう」

軍人たちの心が動き始めた、みんなが激動して立ち上がった。師団は総攻撃へと移り、とうとう国会議事堂の上に赤旗をかかげた。

最後の決戦を前にして説得と教育の方法で行った政治活動が効力を出したのである。

政治活動は次に具体的実情に即して多様な形式と方法で斬新に行うべきである。

政治活動は相異なる状況下で働く、相異なる水準の大衆を相手にして行うことである。政治活動の対象を見ると、そこ

には労働者も、農民もおり、科学者、技術者もいる。また同じ労働者であっても、地下坑の切羽で働く炭鉱夫もおり、森林の中で働く伐採工もおり、鉱山で鉱石を採掘する鉱夫もいる。かといえば人々の年齢、性別、知識水準、趣味、性格も同じでない。

こういう条件の下で政治活動はいつも具体的な実情に即して多様な形式と方法で行ってこそもっと大きな効果を出しうる。

政治活動はまた、革命実践と密接に結びついて行わなければならない。

政治活動の重要な目的はあくまでも提起された課題を成功裏に遂行するところにある。実践と離れた政治活動はためにならない。政治活動の成果は必ず実践の成果で現れるべきであり、それによって評価すべきである。

朝鮮で世人を驚嘆させる奇跡を創造したチョンリマ大進軍を見てもそうである。

戦争によって破壊された経済を復興する 3 カ年計画が終わり、社会主義基礎建設を遂行する道に入っていた当時、難関は一つや二つでなかった。

直面した難局を打開する方途はどこにあるのか。

つねに人民大衆の力を信頼する偉大な金日成主席は降仙の労働者階級を訪ねて彼らと膝を交えた。そしてかもし出された重大な難局について一々知らせ、皆さんが鋼材を計画外に 1 万トンを増産すれば国が腰を伸ばすようになると労

働者階級に呼びかけた。

主席のお話を聞いた降仙の労働者たちは、奮然と立ち上がり、6 万トンしか生産できないといっていた分塊圧延機で持って9万トンの鋼材を生産することを決議し、実際に 12 万トンを生産した。主席が点じた大高揚の烽火はたちまち全国に広まり、朝鮮でチョンリマ運動が始まったのである。

国の前にかもし出された厳しい難関を降仙の労働者階級との虚心坦懐な談話で打開した金日成主席の政治活動、これは政治活動を優先させれば革命実践で提起されるいかに困難で複雑な問題も成功裏に解決していくことができるということを見せている。

主席がともした烽火があったがゆえに朝鮮は人民大衆の高い自発的熱意と創意性にたよって灰燼に帰していた空き地の上に戦後わずか3年間で立ち上がることができたのである。

人々の心臓に火をともせ！

人々の心を動かす政治活動を優先させれば、この世に占領できない要塞や難関などありえない。

国と民族の興亡盛衰の基本

著　者：申賢淑、金蒼景

発行所：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発　行：チュチェ103（2014）年 4月

ㄱ-4835018

E-mail:flph@star-co.net.kp

http://www.naenara.com.kp

朝鮮・平壌

チュチェ103（2014）年

ISBN 978-9946-0-1112-7

9 789946 011127 >